

広島大学人間生活系コースにおける 家庭科教員養成カリキュラムの検討

— 家庭科内容学としての衣生活内容の構想 —

村上かおり・鈴木 明子
(2018年10月4日受理)

Clothing Contents in the Home Economics Teacher Training Curriculum
at Hiroshima University

Kaori Murakami and Akiko Suzuki

Abstract: This study explored the composition of clothing contents for home economics science classes in the home economics teacher training curriculum at Hiroshima University, which was based on the results of attempts to cross-link the curriculum subjects with their contents. Thus, we aimed to obtain suggestions for constructing a home economics teacher training program model. In the new curriculum guidelines, the subject of home economics is described as teaching students a new “perspective and way of thinking about lifestyle activities.” Therefore, a comprehensive perspective on the home economics curriculum, material composition, and lessons is necessary to take advantage of this “lifestyle.” The curriculum to date includes clothing-related framework contents, such as clothing materials, production, composition, and management. Courses were named using keywords that reflect four perspectives and lifestyles, such as “environment” and “design”; e.g., the core subject of the “Introduction to Clothing” lesson was clothing. Students were given the information necessary to solve the problems experienced during the performance of practical training exercises. The results were used to conceive a lesson plan for students to acquire the ability to consider their lifestyle from the four perspectives of “cooperation and collaboration,” “health, comfort, and safety,” “successful creation of living culture,” and “building a sustainable society.”

Key words: Home Economics Teacher Training, Curriculum, Subject Content, Clothing life

キーワード：家庭科教員養成，カリキュラム，教科内容，衣生活

1. はじめに

教員養成カリキュラムにおける「教科に関する科目」には、学校教育の教科内容や、それらを学ぶ子どもたちの実態を踏まえた内容構成が求められている。平成24年5月の中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会による審議のまとめ」で示された「教科と教職を架橋する新たな領域の展開の推進」、事例として示された「教科内容構成に関する科目（仮称）の新設」、

および「各教科の指導法」を各教科の内容と方法を総合した内容に改善する方向は、平成30年度の教職課程認定におけるコアカリキュラム作成に反映された。その全体目標では、「当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。」とされている。教員養成機

能を教職大学院に特化した他大学では、この方向に対応して早くから各教科の内容と方法を統合した授業の試みを行っている例もある。

本研究では、家庭科教員養成のプログラムモデルの構築に向けて、本学本コースで試みている教科教育と教科専門（以下教科内容と称する）の架橋の展開の成果を踏まえて、家庭科内容学としての衣生活内容の構成を構想し、本コースの家庭科教員養成プログラムモデルの構築への示唆を得ることを目的とする。

なお本講座では、教員全員によるカリキュラム検討委員会を設置し、2019年度入学生から導入するカリキュラムの検討を行ってきた。この会では、各授業の4年間の系統性を整理し、有機的な教員養成カリキュラムとするための機能をもたせることをめざした。その試みとして2015年度より1年次の必修授業「人間生活（家庭科）教育概論」において、教科専門と教科教育全教員の参加やシンポジウムを行うなど、一体となって指導計画及び実施に当たり、教科の背景学問である家政学に対する認識を深める授業を展開している¹⁾。

2. 中等家庭科教員養成に求められるもの

家庭科の教科内容は、家庭生活及び生活に関わる全ての事柄を含み、その背景学問は、人文、社会、自然分野及び複合領域の多岐にわたる。さらに、家庭科は、生活にかかわる知識や技術を個別に習得するに留まらず、それらの関係性を理解し、生活を創造する意欲と自立・自律した生活者としての実践的な態度育成を目指す教科である。家庭科における教科教育と教科内容の架橋は、このような「生活者育成」のための目標に照らして、広範な教科内容の構造化と多様な方法論的アプローチを前提として行う必要がある。

本学の人間生活教育学講座において教員養成カリキュラムが目指す到達目標は次の通りである。「カリキュラム全体を通じて時代の変化に対応できる自立した生活者としての生き方や新しい家庭及び人間生活環境の創造に関する教育と実践をなし得る能力を身に付ける。」「そのために、家族を中心とした人間生活における人の行動を物的環境、精神的環境、身体的環境さらには社会的環境という様々な視点で考えさせる専門基礎科目及び専門科目を設け、自己研修能力に優れた中等学校教員としての能力を身に付ける。」(一部省略) これらの目標詳述には、今後の家庭科の方向性を踏まえた教科内容構成に関わる基礎的・基本的考え方が示されている。担当者の人数及び専門性、時間、場所な

ど学習環境の限界もさることながら、カリキュラムの見直しのためには、教科の学習内容構成原理を教科教育担当者と教科内容担当者がともに構築していく姿勢とそれを提示する場が必要である。

3. 現在の学力観について

2017年3月に新学習指導要領が公示され、2030年の社会の在り方とその先の豊かな未来を見据えた教育の方向性が示された。新学習指導要領等においては、教育課程を通じて、子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、教科等を学ぶ本質的な意義を大切にしつつ、教科等横断的な視点も持って育成を目指していくこと、社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会とのかかわりの中で子供たち一人一人の豊かな学びを実現していくことが課題となっている。(中教審答申 平成28年12月)²⁾

これまでの課題に対応して、新しい学習指導要領では、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)、②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義を、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)、③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)の3つの視点から各教科の枠組みが見直され再構成された。

また、各教科は、以下の資質・能力の「三つの柱」に基づき、再整理が図られた。①「何を理解しているか、何ができるか」(生きて働く「知識・技能の習得」)、②「理解していること・できることをどう使うか」(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)である。

全ての教科等において、目標や内容の示し方が大幅に見直され、目標では、「見方・考え方」を働かせて思考させ、資質・能力の三つの柱を育むことが明記された。内容は教科独自の「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」を中心に再構成され、内容を資質・能力ベースで示す工夫がなされている。

表1は家庭科、技術・家庭科(家庭分野)において育成すべき資質・能力を、小学校、中学校、高等学校の発達段階別、資質・能力の三つの柱別に整理して示したものである²⁾。

4. 家庭科独自の見方・考え方

新学習指導要領では、家庭科独自の「生活の営みに

表1 家庭科、技術・家庭科（家庭分野）において育成すべき資質・能力の整理

	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
家庭 高等学校 (共通教科)	<p>自立した生活者に必要な家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族・家庭についての理解 ・乳幼児の子育て支援等や高齢者の生活支援等についての理解と技能 ・生涯の生活設計についての理解 ・各ライフステージに対応した衣食住についての理解と技能 ・生活における経済的計画、消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立についての理解と技能 	<p>家族・家庭や社会における生活の中から問題を見出し課題を設定し、生涯を見通して課題を解決する力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族・家庭や社会における生活の中から問題を見だし、課題を設定する力 ・生活課題について他の生活事象と関連付け、生涯を見通して多角的に捉え、解決策を構想する力 ・実習や観察・実験、調査、交流活動の結果等について、考察したことを科学的な根拠や理由を明確にして論理的に表現する力 ・他者の立場を考え、多様な意見や価値観を取り入れ、計画・実践等について評価・改善する力 	<p>相互に支え合う社会の構築に向けて、主体的に地域社会に参画し、家庭や地域の生活を創造しようとする実践的な態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造しようとする態度 ・様々な年代の人とコミュニケーションを図り、主体的に地域社会に参画しようとする態度 ・生活を楽しみ味わい、豊かさを創造しようとする態度 ・日本の生活文化を継承・創造しようとする態度 ・自己のライフスタイルの実現に向けて、将来の家庭生活や職業生活を見通して学習に取り組もうとする態度
技術・家庭 中学校	<p>生活の自立に必要な家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての基礎的な理解と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭の基本的な機能及び家族についての理解 ・幼児、高齢者についての理解と技能 ・生活の自立に必要な衣食住についての理解と技能 ・消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立についての基礎的な理解と技能 	<p>家族・家庭や地域における生活の中から問題を見出し課題を設定し、これからの生活を展望して課題を解決する力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族・家庭や地域における生活の中から問題を見だし、課題を設定する力 ・生活課題について他の生活事象と関連付け、これからの生活を展望して多角的に捉え、解決策を構想する力 ・実習や観察・実験、調査、交流活動の結果等について、考察したことを根拠や理由を明確にして論理的に表現する力 ・他者の意見を聞き、自分の意見との相違点や共通点を踏まえ、計画・実践等について評価・改善する力 	<p>家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭生活を支える一員として生活をよりよくしようとする態度 ・地域の人々と関わり、協働しようとする態度 ・生活を楽しみ、豊かさを味わおうとする態度 ・日本の生活文化を継承しようとする態度 ・将来の家庭生活や職業との関わりを見通して学習に取り組もうとする態度
家庭 小学校	<p>日常生活に必要な家族や家庭、衣食住、消費や環境等についての基礎的な理解と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭生活と家族についての理解 ・生活の自立の基礎として必要な衣食住についての理解と技能 ・消費生活や環境に配慮した生活の仕方についての理解と技能 	<p>日常生活の中から問題を見出し課題を設定し、課題を解決する力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中から問題を見だし、課題を設定する力 ・生活課題について自分の生活経験と関連付け、様々な解決方法を構想する力 ・実習や観察・実験、調査、交流活動の結果等について、考察したことを根拠や理由を明確にしてわかりやすく表現する力 ・他者の意見を聞き、自分の考えをわかりやすく伝えたりして計画・実践等について評価・改善する力 	<p>家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭生活を大切にすることへの心構え ・家族や地域の人々と関わり、協力しようとする態度 ・生活をしようとする態度 ・日本の生活文化を大切にしようとする態度

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」平成28年12月より抜粋

係の見方・考え方」が示された。これまで家庭科は、教科の背景学問である家政学の総合的特質や学習対象の広範さから、ともすると通教科的資質・能力を、そのまま家庭科という一教科で育むものと捉えてしまうことがあったかもしれない。他教科の学びやその集積を活用して通教科的資質・能力の育成を支える教科としての特性は変わらず重要である。しかしながら、一教科として扱う独自の学習対象や学習方法を明確に意識して、カリキュラムや授業を構想することの必要性が、これまで以上に注目されている。その独自の学習対象が「生活の営み」であり、それに係る見方・考え方は、家庭科の目標、内容及び学習方法まで規定する土台として重要である。

学習指導要領解説では「生活の営みに係る見方・考え方を働かせる」ことを次のように説明している。「家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、「協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築」等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造するために、よりよい生活を工夫することを示したものである。」

ここに示される家庭科の学習対象や、それらを捉える視点、創造する生活の在り方、及び工夫する対象としての「よりよい生活」は、教科の背景学問としての家政学に依拠していると考えられる。

現在の日本の家政学の定義は次のとおりである。「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに、人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」家政学の定義を踏まえると、家庭科で育成する資質・能力は、①科学の知を総合して生活事象を解釈する力、②生活技能習得と日常生活実践に対する価値・態度形成、③他者との相互作用による自己の生活の創発であると考えられることができる。

日本家庭科教育学会では、家庭科教育の目的を「個人及び家族の発達と生活の営みを総合的に捉えて、日々の生活活動の中で、主体的に判断して実践できる能力を育み、明日の生活環境・文化を創ることのできる資質・能力を育成する。」こととしている。主体的に判断し実践できる能力とは、生活に対する問題意識、問題解決に向かう積極的態度、それを可能にする知識・

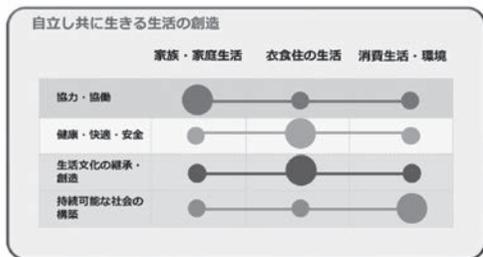
技能の統合されたものである。ここで、「生活」の捉え方を明確にしておく必要がある。生活を構成する要素は多種多様であるが、家政学ではそれらの集合体としてではなく、それら要素の相互作用によって変化する総体として生活を捉える。すなわち、個人から家族・友人などの人間的環境、衣食住生活などの社会的環境、エネルギーなどの自然的環境が相互に作用し合って生活は成り立っていると考える。そのため、個人がどのように周囲の環境に関わるかによって生活の総体は変化する。

このような家政学や「生活」の捉え方に依拠して、今回家庭科独自の資質・能力を育成するための見方・考え方として示された「生活の営みに係る見方・考え方」であるが、「生活の営み」を総合的に捉える視点をもってカリキュラムや題材構成や授業に生かしていく必要がある。それが教育課程全体における家庭科の役割でもあろう。

図1は家庭科が目指す生活の在り方、内容及びそれらを捉える視点を明確に示している。4つの視点は、よりよい生活を工夫するための視点でもあり、深い学びによって資質・能力を鍛える生活概念の形成につながる視点でもある³⁾。

しかしながら、学習指導要領解説では次のような但し書きがある。「なお、この「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点は、家庭科で扱う全ての内容に共通する視点であり、相互に関わり合うものである。したがって、児童・生徒の発達の段階を踏まえるとともに、取上げる内容や題材構成等によって、いずれの視点を重視するのかを教師が適切に定めることが大切である。」

4つの視点を意識して、家庭科で育成する資質・能力や学習対象を俯瞰することによって、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが可能になる。



※主として捉える視点については、大きい丸で示している。取り上げる内容や題材構成等により、どの視点を重視するのかは異なる。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会、「教育課程企画特別部会論点整理」平成27年8月より抜粋

図1 生活の営みに係る見方・考え方

すなわち、資質・能力の三つの柱の中で、主に「理解していること・できること」をどう使うかという「思考力・判断力・表現力等」を鍛えるために、これらの視点が有効に働くと考えられる。

5. 家庭科教員養成における衣生活内容と開講科目

中学校ならびに高等学校の家庭科教員養成課程においては、教科に関する専門科目として次に示す領域の科目を設置する必要がある。中学校課程では、家庭経営学(家族関係学及び家庭経済学を含む。)、被服学(被服製作実習を含む。)、食物学(栄養学、食品学及び調理実習を含む。)、住居学、保育学(実習を含む。))に関する科目を、また高等学校では、家庭経営学(家族関係学及び家庭経済学を含む。)、被服学(被服製作実習を含む。)、食物学(栄養学、食品学及び調理実習を含む。)、住居学(製図を含む。)、保育学(実習及び家庭看護を含む。)、家庭電気・家庭機械・情報処理の科目を設置しなければならない。

衣生活内容を習得する科目として、どのような授業科目が大学において開講されているのかについて、調査結果がある^{4)~6)}。これらの調査によると、教員養成系四年制大学においては、被服材料、被服構成、被服衛生、被服管理の内容の科目がそれぞれ単独に開講されていたことがわかる。しかし近年の大学教員定員削減から、各専門分野の教員が確保できず、多くの大学で衣生活内容の担当教員は1名という現状である⁷⁾。

このように大学を取り巻く環境は変化しているが、教科に関する科目の領域構成は変わっておらず、教員養成教育課程においては、それらの内容を俯瞰し再構造化して教科内容を指導する必要がある。

またその教科内容は、時代に応じた学習指導要領をふまえた内容にすることが必要である。平成30年9月現在、これからの教員養成においては、平成29年3月31日に改訂された新学習指導要領に基づいた教育内容に移行することが求められる。

6. 新学習指導要領における衣生活内容のあり方

新学習指導要領に示された、小学校家庭、中学校技術・家庭 家庭分野⁸⁾と高等学校家庭の内容一覧⁹⁾を表2と表3に示した。

また前述したように新学習指導要領では、表1のように各教科において育成を目指す資質・能力を整理し

表2 小学校家庭、中学校技術・家庭
家庭分野の内容一覧

小学校	中学校
A 家族・家庭生活 (1) 自分の成長と家族・家庭生活 ア 自分の成長の自覚、家庭生活と家族の大切さ、家族との関係 (2) 家族生活と仕事 ア 家族の仕事と生活時間 イ 家族の仕事の計画と工夫 (3) 家族や地域の人々との関わり ア(ア) 家族との絡れ合いや喧らふ ア(イ) 地域の人々との関わり イ 家族や地域の人々との関わり方の工夫 (4) 家族・家庭生活についての課題と実践 ア 日常生活についての課題と計画、実践、評価	A 家族・家庭生活 (1) 自分の成長と家族・家庭生活 ア 自分の成長と家庭生活との関わり、家族・家族の基本的役割、家族や地域の人々との関わり・協働 (2) 幼少の生活と家族 ア(ア) 幼児の発達と生活の特徴、家族の役割 (イ) 幼児の遊びの意義、幼児との関わり方 ア(イ) 幼児との関わり方の工夫 (3) 家族・地域や地域との関わり ア(ア) 家族の協力と家族関係 (イ) 家庭生活と地域との関わり、高齢者との関わり イ 家族関係をよりよくなる方法及び地域の人々と協働する方法の工夫 (4) 家族・家庭生活についての課題と実践 ア 家族・家庭生活又は地域の生活についての課題と計画、実践、評価
B 衣食住の生活 (1) 食事の役割 ア 食事の役割と食事の大切さ、日本の食事の仕方 イ 美しく食べるための調理と計画、実践、評価 (2) 調理の基礎 ア(ア) 材料の分量や手順、調理計画 (イ) 器具や調理器具の安全な取り扱い、加熱調理器具の安全な取り扱い (イ) 材料に応じた洗い方、調理に適した切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後付け (イ) 材料に適した煮方、いため方 (イ) 伝統的な日常食の献立及びみそ汁の調理の仕方 イ おいしく食べるための調理計画及び調理の工夫 (イ) 食の創製の工夫 (3) 栄養を考えた食事 ア(ア) 栄養の必要摂取量の確認と働き (イ) 食品の栄養的特徴と組合せ (イ) 献立を構成する意義、献立作成の方法 イ 食の創製の工夫 (4) 衣類の着脱と手入れ ア(ア) 衣類の主な働き、日常着の快適な着方 (イ) 日常着の手入れ、ボタンの付け及び洗剤の仕方 イ 日常着の快適な着方や手入れの工夫 (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ア(ア) 製作に必要な材料や手順、製作計画 (イ) 手縫いやミシン縫いによる縫い方、用具の安全な取り扱い イ 生活を豊かにするための布を用いた物の製作計画及び製作の工夫 (6) 快適な住まい方 ア(ア) 住まいの主な働き、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方 (イ) 住まいの環境、設備や清潔の仕方 イ 季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方等の工夫	B 衣食住の生活 (1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴 ア(ア) 食事が果たす役割 (イ) 中学生の栄養の役割、健康によい食習慣 イ 健康によい食習慣の工夫 (2) 中学生に必要な栄養素を調った食事 (イ) 栄養の基礎と働き、食品の栄養的特徴 (イ) 中学生の1日に必要な栄養素と献立、献立作成の方法 イ 中学生の1日分の献立の工夫 (3) 伝統的な日常食の文化 ア(ア) 解決に応じた食品の選択 (イ) 食品や調理器具等の安全と衛生に留意した調理の調理 (イ) 材料に適した加熱調理の仕方、基礎的な日常食の調理 (イ) 地域食文化、地域の食材を用いた和食の調理 イ 日常の1食分のための食品の選択と調理計画及び調理の工夫 (4) 衣類の選択と手入れ ア(ア) 衣類と社会生活との関わり、目的に応じた着用や衛生を考えた着用、衣類の選択 (イ) 衣類の計画的な活用、衣類の材料や状態に応じた洗濯の手入れ イ 日常着の選択や手入れの工夫 (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ア 製作する布に適した材料や縫い方、用具の安全な取り扱い イ 生活を豊かにするための縫製や環境に配慮した布を用いた物の製作計画及び製作の工夫 (6) 住居の機能と安全な住まい方 ア(ア) 家族の生活と住居との関わり、住居の基本的な機能 (イ) 住居の安全を考えた住居の考え方 イ 家族の安全を考えた住居の考え方等の工夫 (イ) 衣食住の生活についての課題と実践 ア 暮らし、衣食住、住生活についての課題と計画、実践、評価
C 消費生活・環境 (1) 物や金銭の使い方と買物 ア(ア) 買物の仕組みや消費者の役割、物や金銭の大切さ、計画的な買物 (イ) 身近な物の買物、買方、買物の収集・整理 イ 身近な物の買方、買方の工夫 (2) 環境に配慮した生活 ア 身近な環境との関わり、物の使い分け イ 環境に配慮した物の使い方等の工夫	C 消費生活・環境 (1) 金銭の管理と購入 ア(ア) 購入方法や支払い方法の特徴、計画的な金銭管理 (イ) 生活契約の仕組み、消費者被害、物質・サービスの選択に必要な情報の収集・整理 イ 情報を活用した物質・サービスの購入の工夫 (2) 消費者の権利と責任 ア 消費者の基本的な権利と責任、消費生活が環境や社会に及ぼす影響 イ 身近な消費生活としての消費行動の工夫 (3) 消費生活・環境についての課題と実践 ア 身近な消費生活又は消費生活についての課題と計画、実践、評価

※枠組みは選択項目 3学年で1以上を選択

た案が示された²⁾。以上の情報に基づいて、小学校家庭、中学校技術・家庭 家庭分野、高等学校家庭で育成を目指す衣生活領域の資質・能力を系統的に表4のように整理した。この表は、平成30年3月30日に発行された中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編¹⁰⁾で示された小学校家庭、中学校技術・家庭 家庭分野での衣生活内容に、平成30年7月に文部科学省ホームページにおいて発表された高等学校学習指導要領解説 家庭編⁹⁾に示された衣生活内容を筆者が整理して追記した内容となっている。

これらの資質・能力を習得するために、今回の改訂では、小・中・高の内容も系統性が明確になるように示された。これらの表をみても、各内容の接続性が見えるようになっている。またこの内容で示されたA,B,Cの枠組みは、図1に示した生活の営みに係る関わる見方・考え方をふまえている³⁾。これらの生活事象を「協力・協働」、「健康・快適・安全」、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」の4つの視

点でとらえ、よりよい生活を営むために工夫することが求められる。

これまでの学習指導要領では、食生活が独立し、衣生活は、「衣生活・住生活と自立」という枠組みでとらえられていた。しかし今回の改訂で、衣食住の生活という枠組みで、食生活、衣生活、住生活を総合的にとらえ、これらの4つの視点から、衣食住の生活に係る課題を解決する力を養い、実践できることを目指している。

すなわち、何を学ぶかという内容よりもどのようにすれば、表4に示した資質・能力が育成できるかを意図した内容となっている。

7. 衣生活内容の新カリキュラムの構想

本コースでの衣生活内容に関する科目は、2018年度入学生までは、表5のようになっている。教員A、Bの2名体制であったことから、衣生活内容を自然科学系、社会科学系に大まかに分けて、担当していた。2016年に衣生活内容を担当する教員がBのみとなったため、教員Aの担当科目は、非常勤教員で対応、もしくは廃止の措置をしている。

表5に示すように開講科目の名称は、「アパレル素材学」、「アパレル設計学」、「アパレル管理科学」と学習指導要領にも用いられている被服材料、被服構成、被服管理といった衣生活の具体的な内容と呼応した名称となっている。

これらの名称を用いるメリットは、それぞれの科目内容が名称から明確に捉えられることである。どのような内容展開にすべきか、教員間で科目名称によって把握していたため、重複した授業内容となることはなかった。教員Bである筆者にとっては、教員Aの授業展開をシラバスで確認しながら、既習内容と関連づけて授業を行うことができた。このようにそれぞれの教員が、高い専門性を有した内容の授業を行うことによって、教科内容としての専門性も高まるという認識のもと、授業を展開してきた。しかし近年、学生の学力低下に加え、結果偏重思考の学生が多くなったことから、それぞれの授業内容を関連づけて理解することが難しくなった。複数教員がそれぞれの専門性を背景に授業を行うことが、学生の理解の過程においては、断片的な知識の集積となる。それらを再構成して、教材としての意味を検討することは学生にとっては難しい現状である。2010年度入学生から設置された、教員免許状取得のための必修科目である「教職実践演習」(4年次後期)においては、このような断片的な知識を連携させて整理し、授業作りができるよう、模擬授

表3 高等学校家庭の内容一覧

家庭基礎	家庭総合
<p>A 人の一生と家族・家庭及び福祉</p> <p>(1) 生涯の生活設計</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 人の一生について、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解するとともに、自立した生活を営むために必要な情報の収集、整理を行い、生涯を見通して、生活課題に対応し意思決定をしていくことの重要性について理解を深めること。</p> <p>イ 生涯を見通した自己の生活について主体的に考え、ライフスタイルと将来の家庭生活及び職業生活について考察し、生活設計を工夫すること。</p> <p>(2) 青年期の自立と家庭・家族</p> <p>ア 生涯発達の見点で青年期の課題を理解するとともに、家族・家庭の機能と家族関係、家族・家庭生活を取り巻く社会環境の変化や課題、家庭と社会との重要性について理解を深めること。</p> <p>イ 家庭や地域のよりよい生活を創造するために、自己の意思決定に基づき責任をもって行動することや男女が協力して、家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの重要性について考察すること。</p> <p>(3) 子供の生活と保育</p> <p>ア 乳幼児期の心身の発達と生活、親の役割と保育、子供を取り巻く社会環境、子育て支援について理解するとともに、乳幼児と適切に関わるための基礎的な技能を身に付けること。</p> <p>イ 子供を生み育てることの意義について考え、子供の健やかな発達のために、親や家族及び地域や社会の果たす役割の重要性について考察すること。</p> <p>(4) 高齢者の生活と福祉</p> <p>ア 高齢期の心身の特徴、高齢者を取り巻く社会環境、高齢者の尊厳と自立生活の支援や介護について理解するとともに、生活支援に関する基礎的な技能を身に付けること。</p> <p>イ 高齢者の自立生活を支えるために、家族や地域及び社会の果たす役割の重要性について考察すること。</p> <p>(5) 共生社会と福祉</p> <p>ア 生涯を通して家族・家庭の生活を支える福祉や社会的支援について理解すること。</p> <p>イ 家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生活することの重要性について考察すること。</p>	<p>A 人の一生と家族・家庭及び福祉</p> <p>(1) 生涯の生活設計</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 人の一生について、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解するとともに、自立した生活を営むために必要な情報の収集、整理を行い、生涯を見通して、生活課題に対応し意思決定をしていくことの重要性について理解を深めること。</p> <p>(イ) 生活の営みに必要な金銭、生活時間などの生活資源について理解し、情報の収集、整理が適切に行えること。</p> <p>イ 生涯を見通した自己の生活について主体的に考え、ライフスタイルと将来の家庭生活及び職業生活について考察し、生活設計を工夫すること。</p> <p>(2) 青年期の自立と家庭・家族及び社会</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 生涯発達の見点から各ライフステージの特徴と課題について理解するとともに、青年期の課題である自立や男女の平等と協力、意思決定の重要性について理解を深めること。</p> <p>(イ) 家庭・家庭の機能と家族関係、家族・家庭と法律、家庭生活と福祉などについて理解するとともに、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わり、家族・家庭を取り巻く社会環境の変化や課題について理解を深めること。</p> <p>イ 家庭や地域のよりよい生活を創造するために、自己の意思決定に基づき責任をもって行動することや、男女が協力して、家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの重要性について考察すること。</p> <p>(3) 子供の生活と保育・福祉</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 乳幼児期の心身の発達と生活、子供の遊びと文化、親の役割と保育、子育て支援について理解を深め、子供の発達に適切に関わるための技能を身に付けること。</p> <p>(イ) 子供を取り巻く社会環境の変化や課題及び子供の福祉について理解を深めること。</p> <p>(ロ) 子供を生み育てることの意義や、親や保育の重要性について考え、子供の健やかな発達を支えるために親や家族及び地域や社会の果たす役割の重要性を考察するとともに、子供との適切な関わり方を工夫すること。</p> <p>(4) 高齢者の生活と福祉</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 高齢期の心身の特徴、高齢者の尊厳と自立生活の支援や介護について理解を深め、高齢者の心身の状況に応じて適切に関わるための生活支援に関する基礎的な技能を身に付けること。</p> <p>(イ) 高齢者を取り巻く社会環境の変化や課題及び高齢者福祉について理解を深めること。</p> <p>(ロ) 高齢者の自立生活を支えるために、家族や地域及び社会の果たす役割の重要性について考察し、高齢者の心身の状況に応じた適切な支援の方法や関わり方を工夫すること。</p> <p>(5) 共生社会と福祉</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 生涯を通して家族・家庭の生活を支える福祉や社会的支援について理解すること。</p> <p>(イ) 家庭と地域との関わりについて理解するとともに、高齢者や障害のある人々など様々な人々が共に支え合って生きることの意義について理解を深めること。</p> <p>(ロ) 家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生活することの重要性について考察し、様々な人々との関わり方を工夫すること。</p>
<p>B 衣食住の生活の自立と設計</p> <p>(1) 食生活と健康</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) ライフステージに応じた栄養の特徴や食品の栄養的特質、健康や環境に配慮した食生活について理解し、自己や家族の食生活の計画・管理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>(イ) おいしさの構成要素や食品の調理上の性質、食品衛生について理解し、目的に応じた調理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>イ 食の調理に必要な調理上の性質、食文化の継承を考慮した献立作成や調理計画、健康や環境に配慮した食生活について考察し、自己や家族の食事を工夫すること。</p> <p>(2) 衣生活と健康</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) ライフステージや目的に応じた被服の機能と着装について理解し、健康で快適な衣生活に必要な情報の収集・整理ができること。</p> <p>(イ) 被服材料、被服構成、被服衛生について理解し、被服の計画・管理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>イ 被服の機能性や快適性について考察し、安全で健康や環境に配慮した被服の管理や目的に応じた着装を工夫すること。</p> <p>(3) 住生活と住環境</p> <p>ア ライフステージに応じた住生活の特徴、防災などの安全や環境に配慮した住居の機能について理解し、適切な住居の計画・管理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>イ 住居の機能性や快適性、住居と地域社会との関わりについて考察し、防災などの安全や環境に配慮した住生活・住環境を工夫すること。</p>	<p>B 衣食住の生活の科学と文化</p> <p>(1) 食生活の科学と文化</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 食生活を取り巻く課題、食の安全と衛生、日本と世界の食文化など食と人との関わりについて理解すること。</p> <p>(イ) ライフステージの特徴や課題に着目し、栄養的特質、食品の栄養的特質、健康や環境に配慮した食生活について理解するとともに、自己と家族の食生活の計画・管理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>(ロ) おいしさの構成要素や食品の調理上の性質、食品衛生について科学的に理解し、目的に応じた調理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>(ハ) 主体的に衣生活を営むことができるよう健康及び環境に配慮した自己と家族の食事、日本の食文化の継承・創造について考察し、工夫すること。</p> <p>(2) 衣生活の科学と文化</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 衣生活を取り巻く課題、日本と世界の衣文化など、被服と人との関わりについて理解を深めること。</p> <p>(イ) ライフステージの特徴や課題に着目し、身体特性と被服の機能及び着装について理解するとともに、健康と安全に配慮した自己と家族の衣生活の計画・管理に必要な情報の収集・整理ができること。</p> <p>(ロ) 被服材料、被服構成、被服製作、被服衛生及び被服管理について科学的に理解し、衣生活の自立に必要な技能を身に付けること。</p> <p>(ハ) 主体的に衣生活を営むことができるよう目的や個性に応じた健康で快適、機能的な着装や日本の衣文化の継承・創造について考察し、工夫すること。</p> <p>(3) 住生活の科学と文化</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 住生活を取り巻く課題、日本と世界の住文化など、住まいと人との関わりについて理解を深めること。</p> <p>(イ) ライフステージの特徴や課題に着目し、住生活の特徴、防災などの安全や環境に配慮した住居の機能について科学的に理解し、住生活の計画・管理に必要な技能を身に付けること。</p> <p>(ロ) 家族の生活やライフスタイルに応じた持続可能な住居の計画について理解し、快適で安全な住空間を計画するために必要な情報を収集・整理できること。</p> <p>(ハ) 主体的に住生活を営むことができるようライフステージと住環境に応じた住居の計画、防災などの安全や環境に配慮した住生活・住環境を工夫すること。</p>
<p>C 持続可能な消費生活・環境</p> <p>(1) 生活における経済の計画</p> <p>ア 家計の構造や生活における経済と社会との関わり、家計管理について理解すること。</p> <p>イ 生涯を見通した生活における経済の管理や計画の重要性について、ライフステージや社会保障制度など関連付けて考察すること。</p> <p>(2) 消費行動と意思決定</p> <p>ア 消費者の権利と責任を自覚して行動できるよう消費生活の現状と課題、消費行動における意思決定や契約の重要性、消費者保護の仕組みについて理解するとともに、生活情報を適切に収集・整理できること。</p> <p>イ 自立した消費者として、生活情報を活用し、適切な意思決定に基づいて行動することや責任ある消費について考察し、工夫すること。</p> <p>(3) 持続可能なライフスタイルと環境</p> <p>ア 生活と環境との関わりや持続可能な消費について理解するとともに、持続可能な社会へ参画することの意義について理解すること。</p> <p>イ 持続可能な社会を目指して主体的に行動できるよう、安全で安心な生活と消費について考察し、ライフスタイルを工夫すること。</p>	<p>C 持続可能な消費生活・環境</p> <p>(1) 生活における経済の計画</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 家計の構造について理解するとともに、生活における経済と社会との関わりについて理解を深めること。</p> <p>(イ) 生涯を見通した生活における経済の管理や計画、リスク管理の考え方について理解を深め、情報の収集・整理が適切に行えること。</p> <p>イ 生涯を見通した生活における経済の管理や計画の重要性について、ライフステージごとの課題や社会保障制度など関連付けて考察し、工夫すること。</p> <p>(2) 消費行動と意思決定</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 消費生活の現状と課題、消費行動における意思決定や責任ある消費の重要性について理解を深めるとともに、生活情報の収集・整理が適切に行えること。</p> <p>(イ) 消費者の権利と責任を自覚して行動できるよう、消費者問題や消費者の自立と支援などについて理解するとともに、契約の重要性や消費者保護の仕組みについて理解を深めること。</p> <p>(ロ) 主体的に消費生活として、生活情報を活用し、適切な意思決定に基づいて行動できるよう考察し、責任ある消費について工夫すること。</p> <p>(3) 持続可能なライフスタイルと環境</p> <p>ア 生活と環境との関わりや持続可能な消費について理解するとともに、持続可能な社会へ参画することの意義について理解すること。</p> <p>イ 持続可能な社会を目指して主体的に行動できるよう、安全で安心な生活と消費及び生活文化について考察し、ライフスタイルを工夫すること。</p>
<p>D ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動</p> <p>生活上の課題を設定し、解決に向けて生活を科学的に探究したり、創造したりすることができるような次の事項を指導する。</p> <p>ア ホームプロジェクト及び学校家庭クラブ活動の意義と実施方法について理解すること。</p> <p>イ 自己の家庭生活や地域の生活と関連付けて生活上の課題を設定し、解決方法を考え、計画を立てて実践すること。</p>	<p>D ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動</p> <p>生活上の課題を設定し、解決に向けて生活を科学的に探究したり、創造したりすることができるような次の事項を指導する。</p> <p>ア ホームプロジェクト及び学校家庭クラブ活動の意義と実施方法について理解すること。</p> <p>イ 自己の家庭生活や地域の生活と関連付けて生活上の課題を設定し、解決方法を考え、計画を立てて実践すること。</p>

業の構想を求めた年度もあったが、昨今はその効果を図れない状況である。

以上のような背景から、家庭科内容学としての衣生活内容の構想においては、衣生活内容が断片的な知識と技術の集積にならないように考えることが必要である。すなわち、図1に示した生活に係る見方・考え方の4つの視点で、衣生活内容のなかに意識づけられる

ようなカリキュラムを構築することが望ましい。そこで、表6のような新カリキュラムを構想した。

前述したように、現在本コースの衣生活内容担当教員は1名であり、現行の体制で教員養成に有効な科目を考える必要がある。新学習指導要領においても、被服材料、被服構成、被服製作、被服衛生、被服管理について科学的に理解し、目的に応じた着装の工夫を指導する

広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討
— 家庭科内容学としての衣生活内容の構想 —

表4 小・中・高等学校家庭科で育成を目指す資質・能力の系統表（衣生活内容）

		小学校	中学校	高等学校
知識及び技能	B 衣食住の生活	日常生活に必要な家族や家庭、衣食住、消費や環境などについての基礎的な理解と、それらに係る技能	生活の自立に必要な家族・家庭、衣食住、消費や環境などについての基礎的な理解と、それらに係る技能	家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能
		・衣服の主な働き	・衣服と社会生活との関わり	ライフステージや目的に応じた被服の機能と着装について理解し、健康で快適な衣生活に必要な情報の収集・整理ができる技能
		・衣服の着用と手入れについての基礎的な理解と技能 ・布を用いた製作についての基礎的な理解と技能	衣服の選択と着用、計画的な活用と手入れについての基礎的な理解と技能 ・布を用いた製作についての基礎的な理解と技能	被服材料、被服構成、被服衛生について理解し、被服の計画・管理に必要な技能
思考力・判断力・表現力等	B 衣食住の生活	日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、課題を解決する力	家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、これからの生活を展望して課題を解決する力	家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど、生産を見通して生活の課題を解決する力
		・日常生活の中から衣生活について問題を見だし、課題をもって考え、解決する力	・家族・家庭や地域における生活の中から衣生活について問題を見だし、課題をもって考え、解決する力	被服の機能性や快適性について考察し、安全で健康や環境に配慮した被服の管理や目的に応じた着装を工夫する力
学びに向かう力・人間性等	B 衣食住の生活	家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度	家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度	様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度
		・衣生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度	・衣生活を工夫し創造しようとする実践的な態度	・健康・快適・安全、持続可能な社会の構築などの視点から、よりよい衣生活の創造について考え、工夫することができる態度
		・衣生活における日本の生活文化を大切にしようとする態度	・衣生活における日本の生活文化を継承しようとする態度	・日本と世界の衣文化に関心をもち、伝統文化に蓄積された知恵や経験を現代の衣生活に生かすことができるようにする態度
生活の課題と実践	B 衣食住の生活		・衣生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考え、計画を立てて実践できること ・ホームプロジェクトの学習を進める中で、自己の家庭生活の中から衣生活に関する課題を見だし、課題解決を目指して主体的に計画を立てて実践する問題解決的な学習活動を実践することによって、習得した知識と技能を一層定着し、総合化することができ、問題解決能力と実践的態度を育てること	

表5 衣生活内容の現行カリキュラム
(2018年度入学生)

		教員 A	教員 B
1年	前期 (1ターム)		
	前期 (2ターム)		
	後期 (3ターム)	色彩論	
	後期 (4ターム)		
2年	前期 (1ターム)		
	前期 (2ターム)	アパレル素材学	
	後期 (3ターム)		アパレル設計学
	後期 (4ターム)		アパレル管理科学
3年	前期 (1ターム)		アパレル設計学実習
	前期 (2ターム)		服飾デザイン論
	後期 (3ターム)		
	後期 (4ターム)	アパレル科学実験 (平成29年度より廃止)	
4年	前期 (1ターム)		
	前期 (2ターム)		
	後期 (3ターム)		
	後期 (4ターム)		

きる知識と技能を身に付けることが明示されている。衣生活内容の新カリキュラムにおいても、授業内容はこれまでと同様に、被服材料、被服構成、被服管理が含まれる必要があるが、これらの内容を「環境」、「デザイン」という生活に係る見方・考え方の4つの視点が想起できるキーワードを用い、科目名称を設定した。

表6 衣生活内容の新カリキュラム

		科目名 (単位数)	内容
1年	前期 (1ターム)		
	前期 (2ターム)		
	後期 (3ターム)		
	後期 (4ターム)		
2年	前期 (1ターム)	衣生活概論 (実習を含む) (2)	アパレル素材学、アパレル設計学 (実習を含む)、色彩論、アパレル管理科学の基礎
	前期 (2ターム)	衣生活環境論 (2)	アパレル素材学、アパレル管理科学をベースに環境の視点を加える
	後期 (3ターム)	衣生活デザイン論 (2)	アパレル設計学、服飾デザイン論の内容を展開
	後期 (4ターム)	衣生活科学演習 (1)	アパレル設計学実習とアパレル科学実験を統合し、講義と実験、実習を含む
3年	前期 (1ターム)	衣生活実践実習 (1)	アパレル設計学実習を名称変更、衣生活課題の追究する
	前期 (2ターム)		
	後期 (3ターム)	衣生活課題演習 (1)	衣生活に関する課題を解決するための論文講読、討議、研究方法論の習得
	後期 (4ターム)		
4年	前期 (1ターム)		
	前期 (2ターム)		
	後期 (3ターム)		
	後期 (4ターム)		

また「衣生活概論」として、衣生活内容科目の核となる科目を2年次の1タームに配置し、被服材料、被服構成、被服製作、被服衛生、被服管理の内容を全て網羅する内容とした。さらに学年が上がるにつれて、実

習、演習形式を取り入れ、学生自身も衣生活に対する課題を見いだす力、課題解決探究力を習得できるようにした。

なおこの表には示していないが、学生たちは1年次に「人間生活（家庭科）教育概論」という必修科目を履修する。この科目の目標を次に示す。

「人間生活の質的向上および生活主体者としての生活実践力の育成をめざす人間生活教育について関心をもつとともに、家庭科教育や生涯学習における生活教育の意義を理解し、現代の生活課題を総合的・体系的にとらえ、それらに基づいて自分の生活課題について考えることができる。」

この科目を履修することによって、生活を構築している要素と、それらを多様な視点でとらえることの意義が理解できると考える。このことをふまえ、2年次では、各専門領域の概論を配置する。

8. 「衣生活概論」の内容

専門科目として、衣生活内容領域の最初に設置した「衣生活概論」の授業の目標は、次のように設定した。

「家庭科の学習内容である衣生活を対象として、生涯発達及び環境・技術との相互作用に係る要素を、被服の機能、素材、設計、管理などの視点により、科学的に理解し、衣生活創造のための技術を習得することによって構造化する。そして衣生活に関わる問題を発見し、その解決方法を探り、衣生活創造を行うための教材を追究することができる資質・能力を身につける。」

なお新カリキュラム構想においては、本コースの人間発達、生活経営、食生活、住生活の領域でも、2年次にそれぞれの領域の核となる概論科目を設置することとした。また授業の目標も、「…を対象として、…に係る要素を…の視点により、…によって構造化する。」という表示形式に統一する試みを行っている。

表7に「衣生活概論」の授業計画を示す。この科目では、まず衣生活を学ぶ意義を理解し、衣生活における課題について考える姿勢を習得させたいと考えている。またその後の衣生活内容の科目がどのように展開するかがわかるように進めることで、生活の営みに係る見方・考え方における4つの視点をイメージできるようにすることが期待できる。

図2に衣生活の学びに関連する学問領域を示す。人間が着装する衣服と着装された状況を示す被服を取り巻く学問領域は、衣服そのものを追究する繊維工学を主とした工学系、理学系に加え、衣服を着装する人体

表7 「衣生活概論」の授業計画

回	授業内容	授業形態
1	ガイダンス 衣生活について学ぶ意義 衣生活の現代的な課題を考える。パフォーマンス課題「子供用基平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を子供をもつ親に説明しよう」の提示。	講義・演習
2	被服の機能について、自己の衣生活を振り返り、考える。	講義・演習
3	健康な衣生活とは何か、アパレル素材学、アパレル設計学、アパレル管理科学の視点から考える。	講義・演習
4	ライフサイクルと衣生活について、アパレル素材学、アパレル設計学、アパレル管理科学の視点から考える。	講義・演習
5	衣生活における文化について考える。アパレル設計学の内容として被服の構成(平面構成と立体構成)の視点から考え、日本の衣文化に対する理解を深める。	講義・演習
6	衣生活を支える技術について理解し、技能を習得、それらを学ぶ意義について考える。	講義・実習
7	子供用の基平製作を行う。布の裁断工程から、平面構成について考える。	講義・実習
8	基平製作の縫製工程を通じて、平面構成について考える。	講義・実習
9	基平製作の縫製工程を通じて、平面構成と立体構成の違いの理解を深める。	講義・実習
10	基平製作の縫製工程を通じて、衣服と人体との関係について考える。	講義・実習
11	子供用のパンツ(基平の下衣)製作を行う。布の裁断工程から、立体構成について考える。	講義・実習
12	子供用のパンツ(基平の下衣)製作の縫製工程を通じて、立体構成について理解を深める。	講義・実習
13	子供用の上衣と下衣の製作工程を振り返り、健康な衣生活、ライフステージと衣生活について考える。	講義・実習
14	豊かな衣生活とは何かを考える。パフォーマンス課題「子供用基平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を子供をもつ親に説明する企画を構想、発表する。」を提示。衣生活に関する課題解決のための探究力、創造力を習得する。	講義・演習
15	試験を行う。試験後、解説を行い、衣生活の課題解決に必要な知識と技能の定着をはかり、課題解決探究力につなげる。	試験・講義

各回の学びを集積し、パフォーマンス課題にいかす

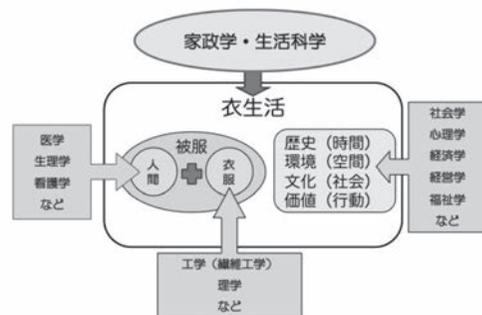


図2 衣生活の学びに関連する学問領域

を対象として追究する医学、生理学などの自然科学系がある。また、人間が衣服を着装するという衣生活の背景にある歴史（時間）、環境（空間）、文化（社会）、価値（行動）の側面から、被服を対象として追究する社会学、心理学などの社会科学系もある。このように多様な視点から、それらの方法論を使って生活を追究

する学問が、教科家庭科の背景学問としての家政学である。また家政学はさまざまな学問分野を包括する総合科学であるだけでなく、生活という営みを対象とすることから、実生活での応用展開を目指す実践科学でもある。第1回目の授業では、これから学ぶ衣生活の内容が、このような幅広い学問領域と関連していることも認識させ、多様な学問を通して、食生活や住生活など本コースで学ぶ他の生活領域ともつながることを意識させる。

この授業では、講義だけではなく被服製作実習も取り入れる。実習では子供用の甚平（上衣）とその下衣であるパンツを製作する。そこで、パフォーマンス課題を「子供用甚平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を子供をもつ親に説明しよう。」として、第1回に提示し、以降各回の授業で、その最終課題に向かって必要な情報を蓄積していく。製作実習も技能習得に加えて、それらがもつ教材的意義を捉えさせる場となる。

実習では、縫製の技能として基礎縫い、ミシンの取り扱いも習得する。始めに製作する甚平は子供用であり、一般的な手ぬぐいを使用する。手ぬぐいの素材を理解する中で、手ぬぐいの用途との関係から被服材料学の知識にもつながる。布の裁断においては、手ぬぐいを全く無駄なく使用する平面構成の知識を被服構成学として学ぶ。甚平を縫製する工程を通じて、着装したときの人間と被服との関係を想像し、着装時のゆとりと密着、通気についても考えることができ、被服衛生学の学びにつながる。また着装時に人体と密着する部分の理解から、汚れの付着、除去など被服管理学に展開できる。平面構成での直線縫いでミシンの取り扱いにも慣れた後、パンツの製作に取りかかる。パンツの製作を通して、立体構成の知識を学び、また子供の身体の大きさの理解、ライフステージと衣生活との関係を考えることができる。子供用の被服製作を行うことで保育学とも関連づけて学ぶことができる。また立体構成と平面構成の違いを学ぶことで衣服の収納など現代の住生活との課題を気づかせることもできると考えられる。

以上のように、第1回～第13回までの授業の中で、一貫してパフォーマンス課題を意識し、課題解決に必要な情報を優先順位をつけて学ぶことによって、実感的に、「協力・協働」、「健康・快適・安全」、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」の4つの視点で生活をとらえることを意識づける。第14回には集積してきた情報と4つの視点を意識して、パフォーマンス課題「子供用甚平とパンツを用いて、豊かな衣生活のあり方を子供をもつ親に説明する企画を構想し、発表する。」に取り組む。自分の考えを他者に

確に伝えるという課題も含んでおり、表現力の習得も期待できる。以上の流れによって、家庭科内容学としての衣生活内容について知識と技術、応用力を養うことを目指す。

9. まとめと今後の課題

本報告では、新学習指導要領において示された資質・能力の育成を目指すため、家庭科教員養成課程における衣生活内容領域のあり方を再考した。

その結果、家庭科内容学としての衣生活内容領域は、生活の営みに係る見方・考え方の4つの視点を軸に、学生自らが生活課題を見いだす力とその課題解決のための探究力を養えるカリキュラムにすることが必要であることが示唆された。衣生活内容領域では、被服製作実習において多様な関連情報相互の関係性を捉えたり、それらの教材的価値を実感的に捉えたりすることが可能であり、パフォーマンス課題に向けての有効な学びの場となる。それらを有効に活用し、学生の学習意欲を喚起することが望ましい。特に衣生活内容領域の最初に履修する「衣生活概論」では、専門教育科目に対する学習意欲を維持することも求められる。図2に示したように衣生活内容は様々な学問領域と関連しているが、食生活、住生活などすべての生活領域科目も同様である。したがって、各領域の授業でも教科内容担当教員が4つの視点から当該の生活課題を追究できる内容を共通にとりいれ、生活課題について、複数の領域から教材研究ができる資質・能力を育成できるカリキュラムにすることが今後の課題である。

家庭科教員に求められる能力は、時代や社会の変化に適応した教材を追究できる研究力と、子供の発達段階や学習環境に応じた教材を開発できる教育力である。これらの力を育むカリキュラムについて、さらに検討を重ねていくことが求められる。

【参考・引用文献】

- 1) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子, 「家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究－広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐる－」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第65号, 2016, pp.257-264
- 2) 中央教育審議会答申「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」平成28年12月
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会, 「教育課程企画特別部会

- 論点整理」平成27年8月
- 4) 「大学における被服学関係の授業科目並びにその講義内容に関する調査結果」, 日本家政学会誌 12(1), 87-93, 1961
 - 5) 新福祐子, 「家政科のカリキュラムと教員免許状 - とくに被服学専攻について -」, 日本繊維製品消費学会誌, 21(10), 415-418, 1980
 - 6) 岩佐美代子, 林豊子, 臼井浜尾, 安田富士子, 竹下弓子, 山田令子, 辻啓子, 「大学における被服教育の新しい方向 - 東海3県の調査から -」, 日本繊維製品消費学会誌, 27(7), 297-302, 1986
 - 7) 全国教育大学協会家庭科部門名簿2017年度版
 - 8) 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編」, 文部科学省, p.119, 開隆堂
 - 9) 「高等学校学習指導要領解説 家庭編」平成30年7月, 文部科学省ホームページ
 - 10) 前掲8), p.118
- ・ 奈須正裕「教員養成における教科内容の学び方と各教科の本質的意義の再考」広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト講演会資料, 2016年1月29日16:30~19:00, 広島大学大学院教育学研究科